

平成26年12月17日(水)

老球の細道91号

「それぞれの臥薪嘗胆」

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

今年度もそれぞれのカテゴリーで地区大会、県大会がだいたい終了した。それぞれのチームで勝利、敗北による悲喜こもごものドラマが繰り返されたことだろう。指導者の方々は将来ある10代の若者たちと、このような大会で勝利の喜び、敗北の悔しさを共有しながら充実した時間を過ごされたことと思う。他の仕事にはないコーチだけが味わえる特権である。私には現在この一喜一憂する充実した時間が味わえない。

それにしても勝負の世界は過酷である。優勝を味わえるチームはたった1チーム。他は皆敗北の屈辱を味わなければならない。いくら自分たちが努力しても必ず勝つとはかぎらない。この時ほど悔しくて眠れない時はない。同じチームに何度も負ける、前回勝ったチームに今度は負ける、屈辱のダメージはさらに大きくなり愚痴が出てくる。

愚痴はグッチのバックにしまいこみ、悔しさを胸にしっかりしまいこもう。次なる戦いはすでにスタートした。胸にしまいこんだ悔しさをバネにして巻き返しを図るためには、あの時の屈辱を絶対忘れてはいけない。そうだ、臥薪嘗胆を実行できるかどうかである。

「臥薪嘗胆」とは中国の故事成語で、復讐のために耐え忍ぶことから、現在では成功するために苦労に耐えるという意味を持つ。『史記』によると紀元前6世紀末、呉の国の王様の夫差(ふさ)の父親は、隣の国の越に殺された。父親は夫差に「必ず仇を取るように」と言い残し、夫差は「三年以内に必ず」と答えた。夫差はその言葉通り国の軍備を充実させ、自らは薪の上で寝ることの痛みでその屈辱を思い出した〔臥薪〕。そして、三年後、夫差は越の国に攻め込み、越の王様の勾踐(こうせん)を降伏させた。

一方降伏した勾踐は夫差の馬小屋の番人にされるなどの苦労を重ねた。許されて越に帰国した後も民衆と共に富国強兵に励み、一方で苦い胆(きも)を嘗めることで屈辱を忘れないようにした〔嘗胆〕。そして、二十二年後、勾踐はついに夫差を破って、屈辱を晴らした。このことから、目的を達成するために、どんな苦労にもじっと耐えることを臥薪嘗胆という。

かつて卓球で世界チャンピオンになり、国際卓球連盟の会長まで務めた荻村伊智朗氏は、現役時代、すさまじいばかりの臥薪嘗胆を実行した。一度負けた相手には二度と負けられないために、ラケットの板の部分に負けた相手の名前を彫りつけて絶対に屈辱を忘れないようにしたという。また、世界チャンピオンになるまでは、日常生活全てにおいて絶対笑わないという誓いを立て、実際に実行した。偉大なる人たち、大きな目標を成し遂げた人たちは、何事もなくすんなりと成功しているわけではないことは常識である。挫折、困難、敗北の屈辱、悔しさの中であきらめず、立ち向かい、目的を達成している。そのために、それぞれの方法で臥薪嘗胆の具体的行動を実践している。

多くのチームの現実には喉元過ぎれば熱さ忘れる。負けたその時は涙に明け暮れるが、翌日になるとけろっとしてケロンパー。だから同じチームがいつも勝ち、同じチームがいつも負ける。そこにアップセット(番狂わせ)や下克上は起こらない。

ゲームの面白さは意外性のあるところにある。競争のあるところに進化向上がある。次なる大会まで多くのチームの臥薪嘗胆を期待する。